

「和」の文化と「差」の文化再考

—新日本事情論—

林 伸一（山口大学人文学部）

1、はじめに

日本の伝統的な価値として「和」を大事にする文化が守られてきたとされる。在日外国人日本語学習者のための月刊『ひらがなタイムス』の発行人である長谷川勝行氏は、『日本人の法則』（1998）の中で、「交際法則」として「グループの和を何よりも大切にする」を挙げている。長谷川（1998）は、同書で日本社会に適応していきたいと思っている外国人に向けて次のように述べている。

「日本は、基本的に日本人という大きなグループにまとまっている。この中には、会社もその一つだが、各自の親しい仲間のグループなどさまざまなグループがあり、グループ内の仲間意識が強い。あなたが本当に日本社会に溶け込みたい、あるいは本当の日本人を知りたいのであれば、日本人の和の中に入っていくことである」。

同氏は、「日本人はチームワークで行動することが多い」とした上で、グループの利益を共有する仲間の「輪」が大切にされており、それが「日本人の行動の源となっている」と指摘している。つまり、仲間の「輪」が仲間意識の「和」を強固にしていくという考え方が背景にあると思われる。

長谷川（1998）は、「はみ出し者を閉め出す」という「交際法則」も別に立てている。つまり、周囲のバランスを崩して、自分の利益を優先するような「はみ出し者は村八分にされてしまう」という訳である。同氏は「日本ではグループの利益を害する者は、最も嫌われる」としている。

それが小中学生の場合だと利害関係だけでなく、言葉や行動パターンの違いを理由に「いじめ」に遭うこともある。外国人だけでなく帰国生や転校生も周囲のバランスを崩すことや生活経験が他の生徒と異なることにより、「ハミゴ」になりやすい。「ハミゴ」とは、孤立児のことであるが、米川（2003）は「仲間はずれにすること。またされること、また、その人」としている。「ハミゴ」の類義語の「ハブ」は「村八分」を語源とするとの説もある。(注1)

2、差異の文化

小学生でも、3・4年生ぐらいのギャング・エイジ（gang age）になると子ども同士のグループができ、集団で行動するようになる。さらにそのグループ間でのトラブルにより、小グループや個

人が仲間はずれ（ハミゴ）になることがある。同じグループ内での「和」の結束性を高めるために他のグループや個人への排他性が強められるという現象である。いわば「差」の強調による仲間内の結束性の強化というイジメの構造が存在する（林、2008参照）。

換言すれば、グループの「和」を尊重する「調和の文化」の裏側にはグループの調和を壊す「はみ出し者」（ハミゴ）を閉め出す「差異の文化」が存在するということになる。

山岸（2002）は、「自分が集団主義的に行動するのは、そうしないと大変な目にあうからしかたなくそうしている」という場合を検討している。そのような場合の「大変な目」とは、村八分的な仲間外れにあうことを指していると思われる。

山岸（2002）は、次のように述べている。「集団のなかで仲間から冷たく扱われたり、村八分にされたりした場合、集団主義社会のなかで、あなたにはほかに行き場がありません。人々が内集団ひいき的に行動している集団主義社会では、自分の集団を追い出された人や、自ら自分の集団を離脱した人をほかの集団の人たちが温かく扱ってくれないからです」。

最近の学生は、4～5人のグループで喫茶店に入っても、マンガ雑誌を手にとったり、携帯電話でメールを打ち始めるなど、互いに会話らしい会話をしないで「ムレているだけ」ということがある。喫茶店は、不気味なほど静かな状態を保っていることになる。

いずれにしても「ムレているだけ」というのは、「日本人は集団主義的に行動してはいるが、必ずしも集団に属することを好んだり、集団の利益を自分の利益よりも優先させる心を持っているわけではない」と山岸（2002）は分析している。

「日本文化」は、集団主義的で「調和」の文化という特徴を持っているという従来からの定説は、もしかするとそのように教え込まれてきた固定観念（ステレオタイプ）によるものではないのかという疑念も起こってくる。

情報社会への移行にともなって、ランキングへの指向性が高まっていることも「差異の文化」を強めていると言えるであろう。それは河合（1995）の分析枠を借りて、林（2007）が指摘した「場」の倫理と「個」の倫理と重なり合う面があり、林（2008）が検討した「和」の文化と「差」の文化に通じる面もあり、ホール（Edward T. Hall、1979）のいう「高コンテクスト文化」と「低コンテクスト文化」の対立とも深く関係するであろう。

3、「和」の文化から「差」の文化への移行

本稿では、質的研究として、具体的な例をあげながら、日本が「和」の文化から「差」の文化への移行期にあることを明らかにしていきたい。いわゆる日本人論や日本文化論に多く見られる二項対立的視点や文化本質論的視点に対しては、1980年代より杉本・マオア（1982）らの批判や、問題点を指摘する研究が多数出現している。そのような批判や問題点の指摘は、確かに的を射た点も多いが、日本人論や日本文化論を論じること自体をタブー視する傾向が支配的な現状は、比較文化学の実証発展にブレーキをかけるものである。

本稿では、現状の日本文化内での自己内対話という視点から、あえて「和」の文化と「差」の文化という二項対立的な観点から立論して、それを超える視点と方法論を模索したい。

3-1、「和」の文化

許 (2009) が、日本文化と中国文化の特徴についてマインド・マップ (mind map (注2)) を用いて調査しているが、日本文化からイメージされる「和」のカテゴリーに含まれる語が最も多く出現したと報告している。10代と20代の日本人103名による日本文化の自己イメージを探る試みである。

「日本文化」の中でも、人柄に関して数多くの記述が得られ、以下のようにアルファベット記号でグループ化されたカテゴリー分けをし、分析している。

表現は異なるが、「和」としてコード化し、意味的な関連性を有していると考えられたものはすべて「和」のカテゴリーにまとめて、以下の表1に示されている。なお、【関】は関連語を示す。

表1. 和に関する表現 (有効回答者数: 101)

許 (2009)

A	和 (13)、平和主義 (2)、事なかれ主義 (2)、和を大切にする、影響されやすい、意見が流されやすい、みんな同じに、周りに合わせる、場の空気を大事にする、もめるのがいやだ、人目を気にする、従順、強い人につき従う	27
C	自己主張が弱い (9)、自己主張をしない (3)、自分の主張が少ない (2)、自己主張が苦手、自分の意見を述べるのが苦手、自分の考えを言わない、自己主義が弱い	18
E	おとなしい (6)、おしとやか (4)、奥ゆかしい (2)、落ち着き、物静か、大和撫子 【関】人に譲る	16
F	建前 (8)、本音と建前 (3)、建前を重んじる、本音	13
K	集団主義 (2)、集団行動を好む (2)、集団性、集団意識、集団行動、集会的、集団 【関】制服	10
J	協調性 (2)、協調性重視 (2)、協調的 (2)、協調性を大切にする、協調性がある、同調性が強い (異質ものを嫌う)	9
L	遠慮 (3)、あいまいな言い回し、あいまい、遠回り表現、婉曲、「NO」と言えない	8

許 (2009) は、「自己主張」「おとなしい」「本音と建前」「協調」「集団」「遠慮」などのキーワードがバラバラに存在しているのではなく、「和」に関する表現としてまとまりをもったコード (code) として捉えている。「和」に関連する語群が最も多く出現し、全出現語数の47.9%を占めている。

上記Aグループの「和」に関しても、「平和主義」のようなプラス・イメージの語だけではなく「事なかれ主義」「影響されやすい」「意見が流されやすい」「もめるのがいやだ」「人目を気にする」「強い人につき従う」など波風を立てないことが美德とする価値観に支えられた語が多く、手放しで肯定できないような要素が含まれている。

「和」に関連する表現の中で、Cグループの「自己主張」に関係する表現の出現度数が18で、「和」の表現の18%を占めている。これから日本人は「自己主張は弱い」という自己イメージと関係していることがわかる。

Eグループの「おとなしい」にコード化される表現は16出現している。日本社会では「自己主張」

よりは「沈黙は金」ということが好まれ、「おとなしい」「おしとやか」「奥ゆかしい」ということが好ましいイメージであり、望ましい価値観として支持されているのではないかと思われる。「自己主張」せず、言わず語らずのうちにお互いの気持ちが分かり合う「以心伝心」が日本社会の一つの特徴だとされている。許（2009）は、日本語の中で、よく省略表現、婉曲表現が用いられているのも「以心伝心」の特徴の表れであると考えている。(註3)

許（2009）の調査で、Fグループのように「本音と建前」などの表現もかなり得られた。日本社会では相手への気持ちを思いやり、場合によって本音と建前を使い分ける傾向がある。特に「建前」に関連する記述が多く見られ、出現度数が「本音」より多かった。この点から、日本人の中では、「本音」より「建前」のほうが「和」を保つために強く意識されていることが分かる。

Kグループの「集団主義」は、Jグループの「協調的」に緊密に関係する表現である。「集団主義」の定義を「集団の利益を個人の利益よりも優先する心の性質」とした場合、「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的だとする『通説』を支持する実証研究はほとんど存在しない」と山岸（2002）は他の研究者の実験の例をあげて述べている。また、山岸（2002）は、「仲良し主義」としての集団主義理解は、現在、いくつかの側面から批判に直面しているとしている。

Lグループの「曖昧な表現」とか「NOと言わない」のような記述も得られたが、これも日本人の「和」の文化を重んじる特徴だと言える。日本人との接触において、「曖昧な表現」で困っている外国人の声をよく耳にする。

許（2009）は、日本人の「中国文化」のイメージもマインド・マップ（mind map）を用いて調査して次の表2に示すように「日本文化」と「中国文化」を対比的に示している。（表2の中のアルフベットは、各項目のカテゴリーを記号化したもの）

表2. 「日本文化」と「中国文化」の比較

許（2009）

日本文化		中国文化	
A	和をキーワードとした表現	i	個性的、個、差
J			
K			
C	自己主張が弱い	a	自己主張が強い
L	曖昧な表現	h	物事をはっきり言う
G	細かい	f	大雑把
D	消極的	e	積極的、情熱的

表2に示されたように、許（2009）はマインドマップ調査で、「日本文化」は和を大事にする文化で、相手への思いやり、配慮を考慮し、自己主張があまり好まれていない傾向が見られ、「中国文化」は「個性」や「差」が好まれており、自分の意見、気持ちなどをはっきり表現する傾向が強いことが日本人に意識されていることが明らかになったとしている。

許（2009）の調査では、また「日本文化」からは「和」、「中国文化」からは「個」という表現が得られたが、それは林（2007）が「場の倫理」と「個の倫理」について論じ、「日本社会にはいまだに『場の倫理』派が多数を占め、中国は『個の倫理』に立脚している」と述べているのに対応して

いる。また、林（2007）は「和」を重んじる『場の倫理』派は紛争回避型で、具体的な規約や内規の改正が議論されるような場合においても、あれこれ議論することを避け、『概ね主旨には賛成』を取り付けようとする」と述べ、これに対して『個の倫理』派は『言語的規約』や内規に立ち戻って、紛争を処理しようとする。そこで、様々な解釈が可能で曖昧な記述は避けたい意識が働く」と述べている。「内規」は外に公表しないことを前提にした決まり事だけに、いかようにも解釈が可能な場合がある。解釈が分かれる場合には、そもそも「内規」をつくったいきさつや起案した人の意向などが議論されることとなる。契約の精神が根付いていない日本では「曖昧な表現」の「内規」が、いつまでも生き続けることがある。(注4)

「中国文化」では、曖昧な記述を避けたい意識から、許（2009）の表2のhグループのような「物事をはっきりいう」などの記述が出現したと思われる。日本では、「以心伝心」でお互いの気持ちが伝わるし、「高コンテクスト文化」とも言われているように伝えようとする情報を文脈（コンテクスト）で読み取ることができるとされている。それに対し、56民族をかかえている多民族・多文化国家としての中国では、自分の気持ちをはっきり表現しないと、相互理解が難しいとされる。自分の気持ちをお互いに積極的に伝え合うことによって「中国文化」の上記eグループのような「積極的」「情熱的」などの記述が得られたのではないと思われる。

自分の気持ちをお互いに積極的に伝え合う中国では、日本のように社会問題になるような陰湿なイジメはあまりないようで、「欺負」という「いじめる、侮る、ばかにする」意を表す言葉はあるが、日本語の「いじめる」ほど深刻な意味合いでは用いられていないようである。

「日本文化」のGグループから「細かい」等の記述が出現したことに対して「中国文化」からは「大雑把」などの記述が得られた。中国では、小さいことにこだわらない一方、日本人と比べ、「大雑把」な人柄の特徴を持つ傾向が見られる。人柄に限らず、日本の外食産業のレシピが「細かい」のに対して、中国の場合は「大雑把」なようである。

許（2009）の調査では、「日本文化」に対するイメージ、つまり日本人が「自文化」に対するイメージはある程度認識できたが、「中国文化」に対するイメージは少なく、まとまりのない記述が多かった。それは、日本人の中国文化に関する情報や知識が少なく、関心が薄いということだけでなく、中国文化が地域によって異なったイメージを有しており、とらえどころがないという背景があると思われる。詳（2009）は、漠然としてとらえどころのない「日本文化」と「中国文化」のイメージを数量化して示している点が特徴的である。

3-2、「誘い」に対する「断り」

「NO」と言えない日本人が話題になったことがある。水谷（1995）は「目上の人、距離をおかなければならないような人に対して『いいえ』を使うことは通常の関係、状態ではなく、それを使うことによって、相手の気持ちや意志を尊重しないということを宣言する役割を果たすことが多く、いさかいや口論のきっかけとなる場合が少なくない」としている。

盛田昭夫と石原慎太郎が『「No」と言える日本』（光文社、1989）を出し、石原慎太郎・渡部昇一・小川和久が『それでも「No」と言える日本』（光文社、1990）を出し、さらに石原慎太郎・江藤淳が『断固「No」と言える日本』（光文社、1991）を出したことにより、果たして日本人は「No」

と言えるようになったのであろうか。

木村 (2008a) は、飲食店などの接客場面における日本語の語用論について、日本人学生と中国・韓国人留学生のロールプレイによる談話分析を行っている。それによると、客からの注文に関するトラブルに対して、日本人学生が店員としてひたすら謝って「紛争回避型」で対応しているのに対して、留学生の方は、店員から客への「弁明」にとれるような応答をしている場合が多かった。

また、木村 (2008b) は、談話完成法 Discourse Completion Test (DCT) により「誘い」に対する「断り」表現を調査している。日本人と外国人留学生との間に差異が認められた意味公式は、目上に対しての「理由提示」、親しい相手に対しての「関係維持」、心理的に距離のある相手に対しての「関係維持」で、いずれも母語話者の使用率の方が高かったと報告している。次いで差異が生じた意味公式は、目上からの「誘い」に対しての「受諾」で、中国、台湾、韓国などからの外国人留学生の使用率の方が高く、目上の相手に対して「Noと言えない外国人学習者」の存在が明らかになったとしている。(注5)

木村 (2008b) の調査対象としたのは、中国語母語話者、韓国朝鮮語母語話者の留学生10代、20代のみ59名 (男性24名・女性35名) であり、アジアの留学生に関しては上記のようなことが言えても、欧米系の留学生に関しては別の結果がでることも十分予想される。

盛田昭夫と石原慎太郎が『「No」と言える日本』(光文社、1989) を出してから20年ほどが経過したが、政治の世界ではいまだに対米従属の日本はアメリカに「No」と言えないYES-man状態にある。齋田 (2009) も「自由化＝アメリカ化という短絡思考」を批判している。

麻生首相は2009年2月5日の衆院予算委員会の答弁で、小泉内閣が「郵政解散」を閣議決定した時の話として「郵政民営化は小泉首相のもとで賛成じゃなかった。解散にサインしないと行って、えらい騒ぎになった。内閣の一員として、最終的に賛成した」と述べた。後になって答弁を修正しているが、「郵政民営化に賛成じゃなかったのに、内閣の一員として、最終的に賛成した」と当時は「Noと言えない大臣だった」ということが明らかになった一幕であった。「Noと言えない総理大臣」の支持率は、ますます下がることとなった。

しかし、個人レベルでは、目上の人に対しても理由を述べて断ることができる日本人が増えてきていることを木村 (2008b) は示している面があると思われる。一方、日本に來ているアジアの留学生などは、言語的なハンディーもあり、「行きたいんですが、ちょっと・・・」と理由を述べることを回避するストラテジー (方策) を用いたり、目上からの「誘い」に対して「受諾」してしまふことがあり、目上の相手に対して立場上「Noと言えない」状態にあるとも言えるだろう。

4、「差」の文化とランキング

戦後の1960年代の高度経済成長は、ホワイトカラー層の増大を生み出し、大学卒業者が増大する学歴社会が到来し、1970年代には「一億総中流」意識を生み出し、「横並び」の調和を乱さないようにする風潮が強まったとも言える。しかし、「一億総中流」と思い込んでいた時代は、もはや過去のものとなった。協調か競争かの問題では、すでに熾烈な競争社会に入ってしまった。

日本社会は「みんな同じで、みんないい」という価値観の「和」の文化の中にあると思っていた

のに、いつの間にか格差社会になっていたわけだが、どうして格差や不平等が生まれ、急速に拡大しているのだろうか。

三浦（2005）が、新たな階層集団として『下流社会』の出現を指摘したことが、世の中に大きな衝撃を与えた。「一億総中流」と思い込んでいたら、いつの間にか「下流社会」が身の回りに広がり、一方で「中流のちょっと上」などとあいまいな表現を用いていた「上流社会」がしっかりと形成されていたことに気付かされたのである。

パリ生まれの『ミシュランガイド』であるが、2007年11月に『ミシュランガイド東京』が発行された。レストランやホテルを一つ星、二つ星、三つ星と格付けし、ランキングして示すガイド本である。レストランやホテルの経営者は、格付けされた星の数に一喜一憂している。星の数が売り上げに大きく響くからである。

待田（2008）は、「平成の日本は、自他ともに認める格付けの大好きな『ランクの帝国』なのだ」と断定している。平成になってからというより、江戸時代にも『名物評判記』というタイトルの格付け本があったそうだから、当時から日本人はランキング好きだったのかもしれない。格付けの対象も戯作や俳諧、学者、飲食店、遊女など多岐にわたったという。江戸文学が専門の中野三敏（九州大学名誉教授）によると「自分たちの文化に自信を持ち始めたころ、一種の町自慢として評判記は生まれる」とのことである（2008年2月11日付、読売新聞より）。

最近パソコンでアクセスしたニュースの閲覧度数が直ちに集計され、順位がつき、高い順位のニュースが毎週テレビ番組でも報じられる（報道2001、サンデージャポンなど）。

もともと年中行事のように年末に「今年の十大ニュース」などを報道各社が発表していたが、近年は「あなたが選ぶ今年の十大ニュース」のように読者参加型で発表する新聞もある。さらに、毎年年末恒例の「流行語大賞」として、その年の世相を反映する言葉のトップ10が発表され、話題となる。ちなみに2008年の「流行語大賞」として選ばれたのは、40歳前後（アラウンド・フォーティー）の女性を表わす「アラフォー」と、お笑い芸人のエド・はるみさんの「グ〜!」であった。

同様に電通総研消費者研究センターが、年末にその年の「話題・注目商品ベスト10」を発表している。2008年の年末には、第1位の任天堂のゲーム機「Wii（ウィー）」に続いて、宮崎駿監督のアニメーション映画『崖の上のポニョ』も第2位にランキングされている。

日本経済新聞は、「NIKKEIプラス1」のコーナーで「何でもランキング」を掲載している。「使い続けている健康器具」として、多い順に「バランスボール、ダンベル・鉄アレイ、マッサージチェア・・・」と並べている。それはいいとしても、「二人で外出『ここを直して』」として女性から男性への注文として「1、食事時のお酒はほどほどにして、2、料理を食べるときはマナーに気を付けて、3、行く先に合わせて服装に注意を・・・」と10位までランキングしている。さらに、男性から女性への注文として「1、買い物に時間をかけすぎないで、2、お店や行く先の選択を迷わないで、3、後で文句を言わずに先に希望を言って・・・」とこれまた10位までランキングしている。（2008年2月2日付、日本経済新聞「NIKKEIプラス1」より）

上記の「二人で外出『ここを直して』」などは、男女間で話し合い、お互いに自己主張すればよきようなものであるが、ランキング表を示して相手への注文に関して、自分だけではない多数派としての根拠を求めようとする心理の表れだと思われる。「個」の論理では一人だけの我がままと退けら

れてしまうのではないかと自信がなく、「和」の論理を背景に自己主張しようとする意図が感じられる。許（2009）の「みんな同じに」「周りに合わせる」「場の空気を大事にする」と関係する点である。

このように現代の日本人は、おびたしいランキングの真只中で生活している。中には生命に関わりを持つようなランキングもあるだろうが、どうでもいいような事柄のランキングまでである。

待田（2008）は、「物事に小さな差異を見つけている。大して面白くないのに、必死に酔おうとしている。これでいいのか」と問題提起している。許（2009）の前掲の表1の中の「人目を気にする」「影響されやすい」表2の「細かい」などの日本人の特徴がその背景にあるように思われる。

日本は、ホール（Edward T. Hall 1979）のいう「高コンテクスト文化」の中に位置するが、それは物事が等価に並ぶ平板な社会で、日本人は追われるように物事に小さな差異をみつけて、順位をつけている。

5、大学のランキング

戦後のベビーブームのあおりを受けて、大学受験の競争が激化し、受験生の偏差値による大学のランキングが行われてきた。その後、少子化傾向が続き、大学受験の18歳人口が減少し、全入時代になってきた。つまり、選ばなければ受験生は、どこかの大学には必ず入学できる状態になっている。偏差値偏重教育が批判され、大学のランキングがなくなったかと言えば、厳然として偏差値によるランキングは存在している。予備校が大学のランキングによって進学指導をしているだけでなく、元立命館大学の教授の中村忠一氏が『危ない大学 1998』（三五館）を出して、「定員割れと廃校」の心配のある大学をランキングして示している。1997年出版の時点で「短大には定員50パーセント割れはここ数年であらわれる。これが次第に下位ランクの4年制大学にあらわれるには、10年の時間的余裕はない」と予言している。(注6)

酒田短期大学は、定員の2倍を超える多数の中国人留学生を受け入れ、学生ビザでの日本への労働目的の入国の足掛かりにさせたことが引き金になり、資金繰りが悪化、2002年に事実上廃校になった。運営する学校法人瑞穂学園に文部科学省が2004年に解散命令を出した。国所轄の学校法人への解散命令としては初めての例となった。

広島安芸女子大学は、短大を4年制に転換して2000年にスタートしたが、入学者は2年連続で30人台と、定員（195人）を大きく割り込んだ。2002年、共学化して立志館大と名前が変わっても経営難は続き、わずか1年で募集停止となった。

山口県萩市の萩国際大学は、前身の萩女子短期大学を改組して1999年に開学したが、開学から定員割れが続いていた。萩国際大学は2005年6月21日に、民事再生法の適用を申請し、広島市の塩見ホールディングスの支援を受けて再建に取り組むことになった。その後、翌2007年度より校名を「山口福祉文化大学」と改称して、「ライフデザイン学部1学部のみをもつ福祉系単科大学」と位置づけられている。

酒田短期大学や萩国際大学などの場合は、極端な定員割れを外国人留学生で埋めようとしたことが、問題である。他の私立大学でも同様の事態に陥っていることは放置しておけないと思われる。

鷺田（2009）も「日本の大学の存立基盤が、少子化で崩れ、過半の大学で定員割れを生じつつある」と指摘している。竹内（2009）も「大学全入時代を迎え、地方の大学の多くは、入学定員を満たすのに必死だ。やる気のない学生、学力のない学生を大量に受け入れざるを得ない経営実態が浮かび上がってくる」としている。このように大学の置かれている絶望的な状態が露見してきている。

6、対話のある授業

これからの大学は、学習意欲の乏しい学生や留学生を含む多様な学生のニーズに応えるための双方向的な「対話のある授業」が求められている。具体的な授業実践としては、2008年度前期に実施した山口大学人文学部の「日本語学特殊講義」において実施したSGEのエクササイズ「握手であいさつ」の内容を開示しておきたい。

受講登録者は40名で、そのうち修了者は36名であった。登録者40名の内、学部2年生が11名、3年生が18名、4年生が3名、留学生が6名、社会人の開放授業受講生が3名であった。男性8名：女性32名で、男女比は、1：4であった。以下のエクササイズの方法とねらいを示し、振り返りシートの記述を分析する。

まず、授業開始時のウォーミングアップとして自己紹介を兼ねた「握手であいさつ」を行なった。次のような文型の中に言葉を入れて、互いにあいさつする活動である。

文型：「日本人は、○だと思う□です。」

○のところに日本人の特徴を□のところに発話者の名前を入れて2分間でできるだけ多くの人と握手してあいさつをした。

「日本人は、事なかれ主義だと思う」のように○には、各自の判断で「あまり自己主張しない」「意見をはっきり言わない」「あいまい」「集団思考」「引っ込み思案」「臆病」などの言葉が入れられた。参加者の二人一組のシェアリング（振り返り）で出された気づきと感想は以下の通りであった。プライバシー保護のため個人名を任意に記号化して示す。

表3 日本人のイメージについて

- A：日本人の印象については、どちらかというとなイナスイメージのものが多くて、あえてマイナスイメージを挙げるところにも、日本人の謙虚さが出ているのかなと思いました。（二年、女性）
- B：私達自身が普段気付いていない点が多く出てきて、改めて日本人の特徴が、良い意味でも悪い意味でも見えてきました。（三年、女性）
- C：皆の意見を聞いていると、日本人はほめる内容の考えを持っている人は少なく、あまり良いイメージではない意見が多いなと思いました。こういう消極的な意見が多いのも、日本人の特徴かなと思います。（三年、女性）

D：自分を見つめるきっかけになります。また、このような発表があったとき、すぐにプラスイメージのことが言えるようになりたいと思いました。(三年、女性)

E：確かに、集団思考であったり、憶病な面はあると思うのですが、頑張り屋だったり、人のことを思いやれるプラスな面も多いと思います。日本人のプラスなところをもっと見ることも大事だなと思いました。(三年、女性)

F：日本人のことについて考えてみるのに大変役立った。(三年、男性)

上記Eの「確かに、集団思考であったり、憶病な面はあると思う」というのは、従来から言われてきた「日本人は、集団志向的である」との言説に対して、マイナス・イメージとして捉えていて、「日本人は、憶病な面はあると思う」と否定的な自己イメージを認識している。それと同時に上記Eは、「頑張り屋だったり、人のことを思いやれるプラスな面も多い」と自己肯定しようとしている。上記以外にも「影響されやすい」「意見が流されやすい」「人目を気にする」などマイナス・イメージの表現が多く出された。前述の許(2009)の調査結果と重なる要素が多く見られた。

では、日本人が自己肯定感を持っていないかということ、インターネット調査で「日本が好き」「まあ好き」という日本人は84%にのぼるとNPO法人「広報駆け込み寺」(東京)が2008年12月17日に発表した。政治・経済の停滞が話題になる中、日本人が自国をどうとらえているか調査する目的で、同法人がネット調査会社を通じて2008年11月に調査を行い、成人男女合計1030人からの回答を得ている。全般的に女性が高く、特に50代女性は9割に達したという。「日本に生れて良かったか」という質問には86%が「良かった」「まあ良かった」と答えている。(2008年12月18日付、読売新聞記事より)

一方、「日本を自慢できる」と回答した人は、全体の60%で、50-60代男性は7割近くだったが、40代男性は52%で最も低かった。「日本が好き」と回答した人のうち、「誇れるとは言えない」と答えた人は33%もいたという。

同法人代表の三隅説夫氏は、「特に働き盛り世代は、日本の政治・経済の不備を実感しており、世界に自慢しにくいと感じているのでは」と分析している。(2008年12月18日付、読売新聞)

上記の表3のA「あえてマイナスイメージを挙げるところにも、日本人の謙虚さが出ている」という記述が、「日本が好き」だが、「誇れるとは言えない」という心情に通じるものがあるだろう。

また、上記の表3の記述は、学生層のコメントであるが、上記Cの「日本人はほめる内容の考えを持っている人は少なく、あまり良いイメージではない意見が多い」という記述も働き盛りの「日本の政治・経済の不備を実感しており、世界に自慢しにくいと感じている」という見方に通じるであろう。

一方、「プラス・イメージのことも言えるようになりたい」という上記Dの記述に見られるように、グループによる教育力が発揮されている側面もある。

SGEの目標の柱の一つに、自己肯定感(self esteem)を得ることがある。自己肯定感が得られないと、他者の欠点を探し出し、足を引っ張るといような「引き下げ」の心理が働き、集団としての教育的な効果が十分に発揮されない状態となる。

「日本人は、 だ」式の断定的な一般論に関しては、林(1999)が「とかく独断的・自己

満足的な言い方になる傾向があり、時には破壊的な影響力を持ち、周りの人間や本人を不幸にする」と述べている。

林（1999）は、「アメリカ人は金持ちだ」の課題例文に対して、グループでの書き替えの結果、「アメリカ人には金持ちもいる」「すべてのアメリカ人が金持ちという訳ではない」など17通りの書き換え例を得て、検討を加えている。課題の例文の妥当性を44人で評定し、[-27]という低い妥当性得点を得ている。最近のアメリカ発の経済不況の中では、「アメリカ人は金持ちだ」の妥当性得点はさらに下がると思われる。

前頁の活動は、いわば空所補充の形で行われ、あらかじめ定められた課題文を書き換える形式ではないが、参加者の様々なバリエーションのある文章を聞くこととなるため、必ずしも単一の断定的な一般論に収束することにはならないと思われる。

表4 留学生とペアを組む

- N：私のペアは中国人留学生だったのですが、本当に話しやすくて色んなことを話せて、もっと時間が欲しいぐらいでした。恥ずかしがりやでコミュニケーション能力が少し欠けていると自分では思っているのですが、この授業を通して人と話すということに慣れていきたいと思っています。本当に楽しい時間を過ごせて良かったです。（三年、女性）
- O：ペアが留学生だったので、ことばに気をつけて話していたのですが、普段自分がどれだけきとうな日本語をしゃべっていたのか気づき、ちょっとショックでした。（三年、女性）
- Y：留学生の人と初めてペアになって話しましたが、やっぱり考え方が違って、楽しかったです。（三年、女性）
- Z：今期はなるべく留学生の方とペアを組んで授業を受けたいと思います。自分の勉強になって、かつ留学生の方の役に立てればと思います。（四年、女性）
- a：日本人に対するイメージと中国人に対するイメージを隣の留学生と話しました。その際、やはりそれぞれ違ったのですが、それでもかぶるところが多く、自分自身の国に対するイメージはどうしても普段の自分自身の経験がかかわってくるのだなと思いました。そして、外からのイメージと自分の中のイメージとのズレを感じました。（四年、女性）

上記Nは、ペアの相手の中国人留学生と話がはずみ、「本当に話しやすくて色んなことを話せて、もっと時間が欲しいぐらいでした」と振り返っている。それは、決して口べたという訳ではないのに、「恥ずかしがりやでコミュニケーション能力が少し欠けている」との自己認識を持っていることを示している。上記Nに限らずおしゃべりであっても「コミュニケーション能力が少し欠けている」と自信を持ってないでいる日本人学生が多いように思われる。

上記Oの「ペアが留学生だったので、ことばに気をつけて話していたのですが、普段自分がどれだけきとうな日本語をしゃべっていたのか気づき、ちょっとショックでした」との振り返りに見られるように、日本人にとっての日本語はまるで空気のようなもので無意識に発話していることが多

いが、相手が留学生となると意識化して日本語を話そうとする。そうするといかに普段の日本語が不完全であったり、乱れていたりすることに気付くこととなる。教師を代表とする大人から、いくら「近頃の若者の言葉は乱れている」と指摘されても、直接「乱れている」ことによる不都合に直面しない限り、ほとんど若者は直そうとはしない。留学生と対面して話すことにより、自分の日本語を客観化し、対象化して、わかりやすい日本語を話していないと自己反省してみることが可能となる。いわば日本人学生にとって留学生が自己像を映し出す鏡の役割を果たしていることになる。

上記Yの「留学生の人と初めてペアになって話しましたが、やっぱり考え方が違って、楽しかった」との振り返りは、「みんな同じで、みんないい」の考え方ではない点が注目に値する。「みんな同じで、みんないい」場合には、考え方が違う人にあうと不安になったり、イライラしたり、居心地が悪くなるものである。「みんな違って、みんないい」をベースとする異文化交流を望んでいたとしても、アジアからの留学生の場合、日本人と姿形が似ているために、授業でのペア・ワークのような意図的な設定でもないとなかなか留学生と話すきっかけを見つけにくいものである。そのような状況の中で、上記Yの「やっぱり考え方が違って、楽しかった」との発言は、結果的には異文化接触を楽しんでいる場合であると思われる。授業後に互いのメール・アドレスを交換している姿も見られた。

また、Zの「今期はなるべく留学生の方とペアを組んで授業を受けたいと思います。自分の勉強になって、かつ留学生の方の役に立てればと思います」という四年生の場合、偶然性に期待するのではなく、意図的計画的に留学生とペアを組むことを表明している例である。

それでは留学生からの反応はどうだったのであろうか。次の表4に留学生の反応を示す。

表5 留学生の反応

- | |
|---|
| <p>J：楽しかったです。新しい日本人と話したり、相談したりしていい勉強になりました。（研究生、中国女性）</p> <p>K：日本人と活動することは面白い。（交換留学生、台湾男性）</p> <p>L：ゲームをして、いろいろな交流の機会があって本当に嬉しかった！このような授業が大好き！（交換留学生、中国女性）</p> <p>B：日本人との交流ができて、うれしかったです。（交換留学生、中国女性）</p> |
|---|

留学生からは「楽しかった」「いい勉強になりました」「面白い」「嬉しかった」などと肯定的な反応が見られた。せっかく期待に胸を膨らめさせて、憧れの日本留学が実現したのに、来る日も来る日も一方的な授業ばかりでは、日本での留学生活に幻滅してしまいかねない。授業場面でも、ほっておくと同国人同士で座り、日本人と話す間もなく交換留学の留学期間が過ぎてしまい、ついに日本人の友達が一人もできないまま帰国してしまうケースも稀ではない。

藤原（2006）は、「同質集団」のなかで教育を受けても、実際の社会は「異質な他者」ばかりであり、必要とされるのは、何より「異質な他者」とのコミュニケーション能力だと主張している。もともと会社員であった藤原（2006）の「どんな職業についても、『異質な他者』とのコミュニケーション

「コミュニケーション能力に優れた人」が筆頭にあげられている。

7、「和」の文化と「一体感」「チームワーク」

生まれたばかりの赤ん坊は、母親との一体感（one-ness）があるから、言葉を発する必要はない。しかし、やがて言葉を獲得していくためには「異質な他者」に働きかけていかなければならない。

「他者」と「自分」が「和」の文化を重んずる同質の集団の中では、説明しなくてもわかってしまうが、異質の者の集まりの中では、自他の支え合う関係（we-ness）の中でのコミュニケーションが求められる。やがて、自他の区別がはっきりして、自分は自分（I-ness）という感覚が確立すると自己主張がはじまる。つまり、一体感（one-ness）⇒自他の関係（we-ness）⇒自分は自分（I-ness）という流れの中で人間は成長していく。人間の成長とは、分離不安を克服していくことであり、個人としての成長だけでなく、文化としての成長も、「和」の文化から脱皮して「差」の文化へと向かう側面を持っていると考えられる。他者を説得するために、論理性より感情が優位になる傾向が強い「和」の文化から脱皮して、感情より論理性が優位になる「差」の文化へと向かうことが日本の言語文化としての成長と発展につながる面を持っていると思われる。

ホンネを主張しようとすれば、他者との差異が目立ち、その「場」の「和」を乱すこともある。ただし、タテマエ上の「和」は、表面的な均衡の上に成り立っているのもろく崩れやすいという弱点もある。より強固な「和」を獲得するためにも互いにホンネを主張し合う必要性がある。

日本人の集団主義的思考のあらわれとしては、学校においてもクラスのまとまり（結束性）を重視している点があげられる。一斉授業の「場」における「一体感」（one-ness）を尊重するのは、日本の学校文化の特徴を表現していると思われる。大学においても、学部としてのまとまり、コースとしてのまとまり、ゼミとしてのまとまりを重視している。

人間関係づくり（リレーションづくり）と自己発見をねらった構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter以下SGE）は、異質な者同士がホンネでぶつかり合う集団体験学習である。SGEは、「伝え合う力」と望ましい人間関係をつくっていかこうとする活動で、コミュニケーション能力の育成に役立つとされる。前項のエクササイズもSGEの活動の中に位置づけられる。

海外渡航経験のある者とない者がホンネで語り合うことにより認知や感情にどのような変化をもたらすかということがSGEの研究テーマになり得る。同質の者同士の間では、共感的理解は得られても、認知の修正や拡大はさほど期待できないであろう。

SGEは、参加した「場」における「ふれあい」を通して仲間意識を育てる。その意味では、われわれ意識（we-feeling）による「和」の文化を育成することに貢献する。同時に、活動の振り返りを通しての分かち合い（sharing：シェアリング）によって、他者との違いを言語化し、意識化することになる。そうすることによって、「個」の自覚を促進し、「差」の文化への接近にも貢献する。その鍵概念の関係性は、次の図1のようになる。

図1に示したように、日本文化は高コンテクスト文化の中であって「場」の倫理を大切に、「和」の文化であると固定的にとらえられるものではなく、むしろ「場」の倫理から「個」の倫理へ、「和」

の文化から「差」の文化への移行期、つまり、低コンテキスト文化へ向かう過渡期にあたり、それぞれの要素がぶつかり合う流動的な状況にあると考えたい。

日本文化は「和」の文化であると固定的にとらえるのは、多くの日本人の中で広範囲に受け入れられている単純化されたステレオタイプのイメージの可能性があるのでないだろうか。

S G Eもインストラクションで実施手順だけでなく「ねらい」を明示し、エクササイズやシェアリングにリーダーが積極的に介入し、最後にリーダーが「まとめ」を行なうと、「みんな同じでみんないい」の一体感重視の方向に向かう。ところが、インストラクションで実施手順は明示しても、目的をある程度ばく然と示し、エクササイズやシェアリングでの参加者の「気づき (awareness)」を大切にし、リーダーの介入を抑え気味にし、最後はオープン・エンド (open-end) にすると、「みんな違ってみんないい」の個性尊重の内容となる。

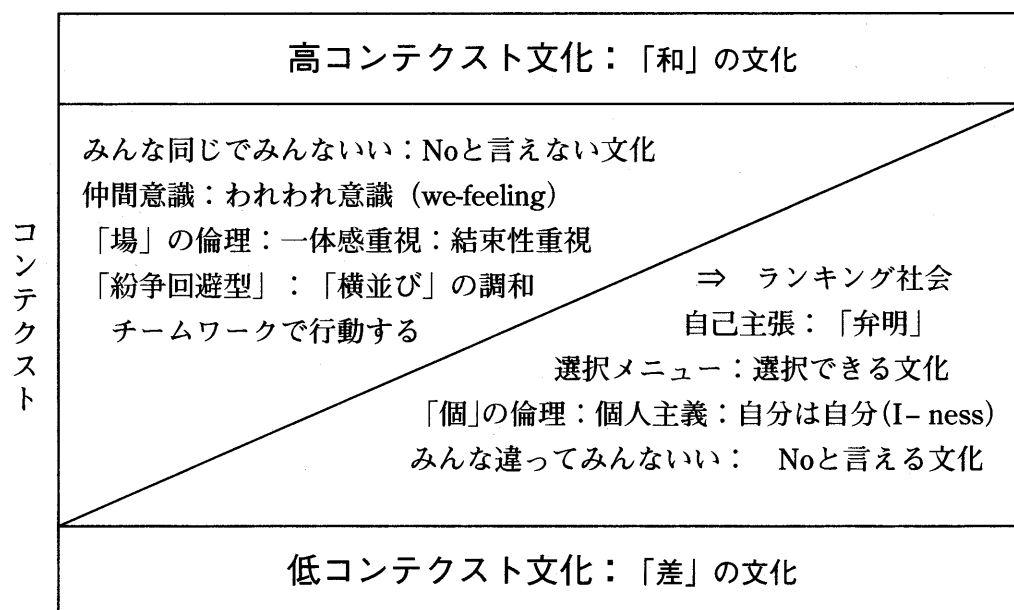


図1、「和」の文化と「差」の文化の関係

図1の縦軸はコンテキストの高低を示し、横軸は時間軸を示している。また、図1の中の大文字は文化的特徴を示し、細字はその特徴に当てはまる例と概念のキーワードを示している。

図1に「場」の倫理と「和」の文化が、ホール (1979) のいう「高コンテキスト文化」に属することを示したが、宮島 (1999) は、「人々がどのような『場』に置かれていて、どのような規範や利害の支配の下にあるかということが、ある文化の資源の有効性を規定する」と言及している。

服部 (2005) は「『和』はグループに調和をもたらし、人間が平和に暮らせる道徳律のようなイメージがあります。しかし、『和の精神』には全体主義思想が隠れており、個人の感情や善悪の判断を否定する側面があります」と「和の精神」に対する批判的見解を示している。

かつて「和の精神」を重んじるあまり、太平洋戦争へなだれ込んでいった時代に異議申し立てを封じた全体主義の傾向があったことを反省する必要があるだろう。一見、美しく見える「和」の文化の裏には、「場の雰囲気」に流される危険性が隠れていることを注意深く見ておく必要がある。

8. 今後の課題

チームの「和」をもって、他チームに「差」をつけるスポーツが日本では、人気がある。野球やサッカーなどの球技、シンクロナイズド・スイミングや駅伝などは秀でた個人技だけでは優勝することができない。ジャーナリストのR.ホワイトティング（1990）は『和をもって日本となす』という本の中で「野球はベースボールではない」として日米の文化的な差異について論じている。

チームワークの力で難局を乗り越えていく集団の技をもってすれば、現在の経済不況もワークシェアリングなどで従業員の解雇をせずに共存共栄の道が開けるのではないだろうか。会社の構成員もグループとしての仲間意識が強ければ、従業員同士で雇用を分け合うために、労働時間短縮や目減りする賃金を副業で補うなどの方策を考え出すことが可能であると思われる。

H.C.トリアンディス（2002）によれば、「個人主義の社会は業績、能力、競争心、科学および近代化を強調し、経済的に裕福であり、成功を収める人びとに向いている」とのことである。日本が、高度経済成長時代を経て、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（注）などと持ち上げられていた時代には、業績、能力、競争心、科学および近代化を強調する「個人主義の社会」つまり、差の文化が向いていたのかもしれない。大学をはじめ学校文化も大きく「個人主義の社会」実現を目指して舵を切ってきたように思われる。しかし、現在の「日立、7000億円赤字、NECは2900億円」「非正規12万5000人失職へ」（朝日新聞、2009年1月31日付）というような記事が容赦なく流れてくる現代あっては、差異の文化への移行をさらに加速する動きを見直してみる必要があるだろう。

H.C.トリアンディス（2002）によれば、「個人主義文化では、孤独感や社会的サポートが不十分であるといった問題もある。さらに、対人関係は集団主義文化と比べると簡略化されて、あまり親密ではない」とされる。現代日本の若者や老人の孤独感は広く、深く、若者の自殺や独居老人の孤独死が社会問題化している。非正規社員のみならず正規社員の大失職時代にあって、セイフティー・ネットなどの社会的サポートが不十分であるとの指摘がされながら、対策がとられていないという問題もある。「対人関係は集団主義文化と比べると簡略化されて、あまり親密ではない」とされる点でも、イジメの問題や無差別殺傷事件など人間関係が希薄化しているためのひずみも噴出している。

ただし、「文化が集団主義で厳格な場合、高い水準の自尊心がもてないことから自殺率が高い」（H.C.トリアンディス、2002）という指摘もあり、日本人の自殺率の高さは、「和」の文化と「差」の文化のいずれの要素からも、その要因が考えられる。

町沢（1999）は「日本でもっともうつになりやすいのは、自己否定的な人」で、「自己卑下の顕著な人ほどうつ病になる」としている。このような見方は「高い水準の自尊心がもてないことから自殺率が高い」とするH.C.トリアンディス（2002）の見解に呼応する。

H.C.トリアンディス（2002）は、若い人に向けて「対人関係においては集団主義者になること」を勧め、同時に「大きな集団にいるときには、個人主義的であるべきである」としている。同氏は「良好な精神状態は、個人主義と集団主義の両志向を行動のレパートリーに含むことによって保たれ、状況に応じて個人主義的または集団主義的な行動が実践できることが望ましい」との指針を示している。

元来、人間は個人主義と集団主義の両義性を兼ね備えており、人によっていずれかの側面が強く

表れるため「あの人は個人主義者だ」とか「この人は集団主義者だ」というレッテルを貼ることとなる。日本人も様々だが、個人主義的な側面と集団主義的な側面がそれぞれ個人の行動面に表れて、それが集積する形で「日本人は欧米人に比べて集団主義的だ」などと言われるのであろう。個人主義的な側面と集団主義的な側面を自由に使い分けできれば、行き詰まってうつ病になるなど、自殺しなければならないような状況を乗り越えられるのではないだろうか。

千石（1985）は、『現代若者論』の中で「親友」は、親から離れた高校生以上の「意味ある他者」となるとした上で、次のように述べている。

「心の友である意味ある他者は、今日の日本の若者にとって、かつてないほど重要といえるだろう。明らかに、若者が助け合って、貧困や病気や災害や戦争に立ち向う状況は無くなってしまった。経済成長の過程でもなおこの状況が続いたが、成長の終焉とともに、偏差値による個人間の競争へと移行した」。つまり、日本が「和」の文化から「差」の文化へと移行したのである。さらに、千石（1985）は、「若者心理をして、深い友情を求めることと、対立競争へ導くことのアンビバレントを強めるようになってきたのである」としている。「深い友情を求めること」は、「和」の文化志向を示し、「対立競争へ導くこと」は、「差」の文化志向を示すというように「アンビバレント (ambivalent)」な状況にある。両者の相反する感情が、日本の若者に限らず、日本人々の中に共存している。(注8)

國分（2008）は、カウンセリングのストラテジーの多様性を説明する中で「どのような人に」「どのような時に」「どのような方法で」と立案するときには手掛かりとなるフレーム（枠組み）を持つことが必要であると説いている。自我の成熟度に応じて、現実原則志向が適している場合と快楽原則が適している場合を見極めて対処すべきとの指針を示している。このように人間が生活していくうえで、快楽原則と現実原則を自由に出し入れできるようになる柔軟性が求められているが、本稿では個人主義原則と集団主義原則を適切に自由に使い分けできるようになることを提唱したい。それは、人間がそれぞれ男性性と女性性を併せ持っていて、無意識にそれぞれを使い分けているのと似ているイメージであり、無理難題を提案しているのではない。

また、唯一量的研究が科学的で、質的研究は非科学的と決めつけてしまうのではなく、量的研究の不十分な点を質的研究が補完することもあり、質的研究によって得られた仮設が量的研究によって検証される場合もある。「どのようなテーマに」「どのような場合に」「どのような対象に」「どのような方法を」用いて研究するかが肝要で、量的研究と質的研究を適切に使い分けていく姿勢が問われていると思われる。本稿では許（2009）のマインド・マップを用いた量的な調査を基に、調査結果をフォローアップする形で、具体例をあげながら質的に検討した。今後、本テーマにおける質的研究の信頼性と妥当性を確保するために、さらなるフォローアップ検証の必要性があるだろう。

【注】

- (注1) 「ハミゴ」「ハブ」などの仲間外れを表わす言葉の量的な調査と現代大学生の孤立性・分断状況を探る質的な検討については、梶村知美・林伸一（2009）「仲間外れを表わす「ハミ」「ハブ」「ハネ」類の言語調査—現代大学生の孤立性・分断状況を探る—」山口大学大学機構発行『大学教育』第6号pp.127-142を参照していただきたい。
- (注2) マインド・マップは、トニー・ブザン（Tony Buzan）らの提唱した「心の意味地図」の意であり、一枚の紙の中心にテーマを書き、その周りに連想する語を放射状に書いていく記述法である。許（2009）は調査法として用いた。
- (注3) 「以心伝心ゲーム」というタイトルの非言語伝達のエクササイズを林伸一（2009）は、「ペア・ワーク教育論—対話のある授業—」として紹介している。中国四国教育学会編『教育研究紀要（CD-ROM版）』第54号pp.65-70参照。
- (注4) 東京都水道局の新制服用ワッペン約2万個が内規違反のデザインだとして、約3500万円かけて作り直していたことが分かった。新デザインは波線1本が消えただけの違いで、公費の無駄遣いと指摘もありそうだが、同局は「内規違反は放置できなかった」としている。（2009年4月10日付け朝日新聞記事より）
- (注5) 木村（2008b）の研究は「行きたくないのに誘われたら・日本人断る際も気遣い・山大院生・留学生との違い調査」として読売新聞（山口県版）に掲載された。（2009年1月30日付け）
- (注6) 中村忠一著『危ない大学—大学選びのための最新学校経営事情〈2000年度版〉』も三五館から発行されている。
- (注7) ハーバード大学のエズラ・F・ヴォーゲル教授によって書かれた『ジャパン・アズ・ナンバーワン—アメリカへの教訓—』は、バブル前で日米経済摩擦真っ盛りの1976年にTBSブリタニカから出版された。
- (注8) ambivalent は「相反する（矛盾する）感情を持つ、どちらかを決めかねる、両面価値的な」の意の形容詞。

【引用文献】

- 河合隼雄（1995）『働きざかりの心理学』新潮文庫
- 木村直美（2008a）「接客場面における日本語の語用論について～中国人、韓国人留学生のロールプレイによる談話分析～」山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』第31号、pp. 74-82
- 木村直美（2008b）「外国人日本語学習者と日本語母語話者の『断り』表現比較—談話完成法による分析—」『平成20年度日本語教育学会第10回地区研究集会予稿集』pp. 4-13
- 許 恵玉（2009）『『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究—日本人のマインドマップ調査による検討—』山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』第32号、pp. 136-150
- 國分久子（2008）「ストラテジーの多様性」國分康孝監修『カウンセリング心理学事典』精信書房
- 杉本良夫・ロス・マオア（1982）『日本人論に関する12章』学陽書房
- 千石 保（1985）『現代若者論』弘文堂
- 竹内 薫（2009）「若手科学者を格差が襲う・減りゆく日本の理工教育」『中央公論』2月号、pp.68-75
- H.C.トリアンディス（2002）『個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化—』北大路書房（=1995 Harry C.Triandis *INDIVIDUALISM AND COLLECTIVISM* Westview Press,Inc）
- 中村忠一（1998）『危ない大学 1998』三五館
- 長谷川勝行（1998）『日本人の法則』（ひらタイプックス）ヤック企画
- 服部雄一（2005）『ひきこもりと家族トラウマ』NHK出版
- 林 伸一（1999）「思い込み文への遡行とストラテジー研究—論理療法と日本語教育の接点—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第25号、pp.49-60
- 林 伸一（2007）「場の倫理と個の倫理—日本事情論としての考察—」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第57号pp. 1-15
- 林 伸一（2008）『『和』の文化と『差』の文化—日本事情論としての考察—』日本比較文化学会発行『比較文化研究』No.82、pp.81-92
- 藤原和博（2006）「公立高校再建なくして国栄えず」『文藝春秋』11月号、pp. 198-207
- ホール、E. T. 岩田慶治・谷泰訳（1979）『文化を超えて』TBSブリタニカ
- ホワイトティング、R.（1990）『和をもって日本となす』角川書店
- 町沢静夫（1999）『なぜ「いい人」は心を病むのか』PHP研究所
- 待田晋哉（2008）「ランクの帝国—平板な社会・差異に酔う」2008年2月11日付読売新聞
- 三浦 展（2005）『下流社会—新たな階層集団の出現—』光文社
- 水谷 修（1995）「返事、曖昧さ」水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕『日本事情ハンドブック』大修館書店
- 宮島 喬（1999）『文化と不平等』有斐閣
- 山岸俊男（2002）『心でっかちな日本人—集団主義文化という幻想—』日本経済新聞社
- 米川明彦（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版
- 鷲田小彌太（2009）「少子化と制度改革がもたらしたものの・大学教授に冬きたる、か？」『中央公論』2月号、pp.60-67